

はじめに

YMFS 調査研究

障害者スポーツ・プロジェクト・リーダー

藤田紀昭

パリパラリンピック(以降パリ大会)は 8 月 28 日から 9 月 8 日までの 12 日間開催され、168 の国と地域及び難民選手団、約 4,400 人が参加した。観戦チケットはロンドン大会の 275 万枚には及ばないものの 250 万枚が売れ、会場には多くの観客が訪れた。

金メダル獲得数は中国が 94 個でトップ、以下イギリス(49 個)、アメリカ(36 個)と続く。メダルランキング上位 10 か国のうち、1996 年以降の夏季大会の開催国は中国、イギリス、アメリカ、ブラジル、フランス、オーストラリア、日本の 7 か国で、パラリンピックの自国開催が競技強化に対してポジティブな影響を与えていることが推測される。

日本からは 175 人の選手が参加した。金メダルは東京大会より 1 個増え 14 個、銀 10、銅 17 の計 41 個(東京大会は 51 個)、メダルランキングで 10 位であった。リオパラリンピックでは金メダル 0、ランキング 64 位だったことを考えれば、その後の選手強化は一定の水準を保っているといえよう。

一方で車いすテニスの小田凱人選手は自身の初戦前に「試合はあるけどテレビ放送はないらしいです」とテレビ中継のないことの不満を示した。東京大会と比べて報道量は明らかに減少し、パラリンピックに対する人々の関心も薄れたのではないかと不安視する向きもある。本報告書では報道量の変化などを客観的な数字で報告している。

本研究プロジェクトでは、2012 年以来、パラリンピック、パラスポーツを取り巻く環境の変化を客観的データによって明らかにしてきた。これまでの足跡は下表に示すとおりである。

		調査方式	2012 (H24)	2013 (H25)	2014 (H26)	2015 (H27)	2016 (H28)	2017 (H29)	2018 (H30)	2019 (R1)	2020 (R2)	2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)	2024 (R6)
大学	障害者スポーツ環境	定量的調査	○		○									○	
	先進的取り組み	定性的調査					○	○	○	○				○	
選手のスポーツキャリア	パラリンピアン のスポーツキャリア	定量的調査		○											
	ジャバ選手 のスポーツキャリア	定量的調査				○									
	障害者スポーツ選手 のスポーツキャリア	定性的調査			○					○	○	○	○	○	○
	コロナ禍における アスリート活動状況	定性的調査									○				
指導者	パラリンピック 指導者の現状	定量的調査		○											
	障害者スポーツ コーチ、スタッフの現状	定性的調査			○										
競技団体	障害者スポーツ 競技団体活動の実態	定量的調査		○					○					○	
	障害者スポーツ 競技団体の現状	定性的調査			○										
地域現場	地域現場の実態	定量的調査 定性的調査						○	○	○					
社会的認知度	パラリンピアン の社会的認知度	定量的調査			○		○		○			○	○		○
メディア	パラリンピックTV放送	定量的調査					○					○	○		○
	障害者SP関連CF状況	定量的調査						○					○		
ケーススタディ	チャレンジ！ユニ★スポ	定量的調査 定性的調査								○	○	○	○	○	

今年度は、障害者スポーツ選手のキャリア調査(定性的調査)、テレビメディアによる障害者スポーツ情報発信環境調査(定量的調査)、パラリンピアンに対する社会的認知度調査(定量的調査)を実施し、テレビメディアに関する調査とパラリンピアン認知度調査の結果については、2025 年 2 月に実施したメディア関係者に対する懇談会を通じて情報発信したところである。本報告書はこれらの調査結果を広く情報提供するものである。

第 1 章は今年度実施した障害者スポーツ選手のキャリア調査の結果を報告している。今年度は肢体不自由の選手 7 人、視覚障害の選手 9 人、聴覚障害の選手 8 人、計 24 人のインタビュー調査を実施した。競技は陸上競技、水泳、射撃、カヌー、馬術、バドミントン、ラグビーなど多岐にわたっている。これまでインタビューできていなかった聴覚障害のある選手の調査ができたことが今年度の特徴である。次年度実施される予定のデフリンピックで選手の活躍が期待されるところであるが、そうした選手の姿の一端を示すことができたのではないかと思う。この調査は 2019(令和 1)年から実施し、今年度で累計 100 名のインタビューを行った。パラスポーツ関係でこれほどたくさんの選手のインタビュー調査は過去に例がない。ご協力いただいた選手、関係者の皆様に心より感謝したい。次年度これらの調査結果を丁寧に分析していく予定である。

第 2 章はパリパラリンピックに関するテレビ報道量に関する調査の結果を報告している。北京大会(2008 年)から東京大会(2021 年)までの調査と同様にパラリンピック大会前 1 か月間、大会期間中、そして大会後 1 か月間の報道量を調査した。パリ大会のテレビ報道量は東京大会と比べると大きく減少し、ロンドン大会とほぼ同じ報道量であった。東京大会に向けての放送のための準備大会としてのリオ大会、そして国内開催となった東京大会の報道量が突出していることがわかる。次の第 3 章の結果では、他方、パラリンピックを見なかったという人はリオ大会 39.5%、東京大会 42.6%、パリ大会 45.0%で大幅に増加しているとはいえない。近年、大会の観戦方法はインターネットやオンデマンドコンテンツの視聴など多様化してきており、テレビ報道量の減少がそのまま人々の関心の低下を示しているとはいえないかもしれない。今後の推移を見ていく必要があるのではないだろうか。

第 3 章はパラリンピアン社会認知度調査の結果を報告している。認知度が最も高かったのは、パラスポーツやパラリンピックに多くの人々に関心を持ってもらいたいと積極的に発言をしている車いすテニスの小田凱人選手であった。前回までのトップが国枝選手だったことを考えるとまさに後継者といえるかもしれない。しかしながら、個々の選手に対する認知度はこれまでの調査と比較してそれほど高まっているとはいえない。テレビ報道量の調査結果と合わせて考えると、パラリンピック、パラスポーツ、パラリンピアンはまだまだメジャーとはいえないまでも、人々の関心は一定保たれているといったところが現状であろうか。このほか、次年度以降開催予定のデフリンピックや愛知・名古屋アジアパラ競技大会に関する調査結果についても報告しているが、これらの大会に関してはまだ認知度が低いと言わざるを得ない状況である。

過年度の調査結果と合わせて、本報告書をご覧ください、パラリンピック、パラリンピアン、パラスポーツを取り巻く環境や状況の変化をご確認いただければ、また質問、ご批判等いただければプロジェクトチームとしても幸甚である。次年度は100名の方にお答えいただいたインタビュー結果をまとめるとともに、デフリンピック開催に合わせた調査などもできればと考えている。最後に、調査に様々な形でご協力いただいた皆様に心より感謝の意を表したい。ありがとうございました。

■障害者スポーツ・プロジェクト

リーダー	藤田紀昭	日本福祉大学大学院スポーツ科学研究科	教授
メンバー (五十音順)	小淵和也	(公財)笹川スポーツ財団スポーツ政策研究所	政策ディレクター
	河合純一	(公財)日本パラスポーツ協会 日本パラリンピック委員会	委員長
	河西正博	同志社大学スポーツ健康科学部	助教
	齊藤まゆみ	筑波大学体育系	教授
事務局	加賀谷牧	(公財)ヤマハ発動機スポーツ振興財団	

■目次

第 1 章 障害者スポーツ選手のキャリア調査	1
概要	2
調査報告	5
キャリア調査インタビュー一覧	6
選手別インタビュー	16
第 2 章 テレビメディアによる障害者スポーツ情報発信環境調査	99
調査概要	100
(1)調査目的	100
(2)データ抽出内容	100
(3)データ抽出条件	100
(4)データ抽出期間	101
(5)データ提供者	101
(6)集計・分析	101
(7)大会名の略称	101
要約	102
調査報告	103
1. メディア放送時間(単純集計)	104
1.1 過去 5 大会の放送時間の変遷	104
1.2 開催前・開催中・開催後の放送時間	104
1.3 テレビ局別の放送時間	105
1.4 番組カテゴリー別の放送時間	106
1.5 番組内コーナー別に見る放送時間	107
2. メディア放送時間(クロス集計)	108
2.1 テレビ局別に見る大会別放送時間	108
2.2 番組カテゴリー別に見る 5 大会の放送時間	110
2.3 番組内コーナー別に見る大会別放送時間	114
3. パリ大会日本代表選手別の放送時間	115
4. まとめと考察	117

第 3 章 パラリンピアンに対する社会的認知度調査	119
調査概要	120
(1)調査目的	120
(2)調査内容	120
(3)調査対象	120
(4)調査期間	120
(5)調査方法	120
(6)回答結果	120
(7)調査報告ならびにトピック内に示した図表の注意事項	121
(8)大会名の略称	121
要約	122
調査報告	123
1. パラリンピアンの認知度	124
2. パラリンピックの観戦	126
2.1 パラリンピックの観戦形態	126
2.2 観戦種目	128
2.3 大会観戦後の感想	129
3. 東京 2025 デフリンピックと愛知・名古屋 2026 アジアパラ競技大会について	130
3.1 大会の認知度	130
3.2 大会の認知経路	131
3.3 東京 2025 デフリンピックへの関心度	132
4. 障害者スポーツとの接点	133
4.1 障害のある人がスポーツを行う光景・種目	133
4.2 身近に障害者がいるか否かの状況	135
5. クロス集計	136
5.1 身近に障害者がいるか否かで見るパラリンピック観戦	136
5.2 身近に障害者がいるか否かで見る観戦後の感想	137
5.3 身近に障害者がいるか否かでみる障害のある人がスポーツを行う光景	138
5.4 日常生活で障害のある人がスポーツを行う光景を見ることの有無別に見る観戦	139
6. まとめと考察	140
附録 1 パラリンピアンに対する社会的認知度調査 調査票	143
附録 2 パラリンピアンに対する社会的認知度調査 集計表	151